

グローバル化を目指す高等専門学校（高専）と近代化、産業立国を目指す新興国。両者の思惑が一致して高専は「KOSEN」として羽ばたこうとしている。国内の高専も各国からの留学生を積極的に受け入れ、ものづくりのDNAを留学生に移植する。KOSENが国際語になりつつある。

「いつか母国の役に立つ」

マレーシアなどから留学生続々



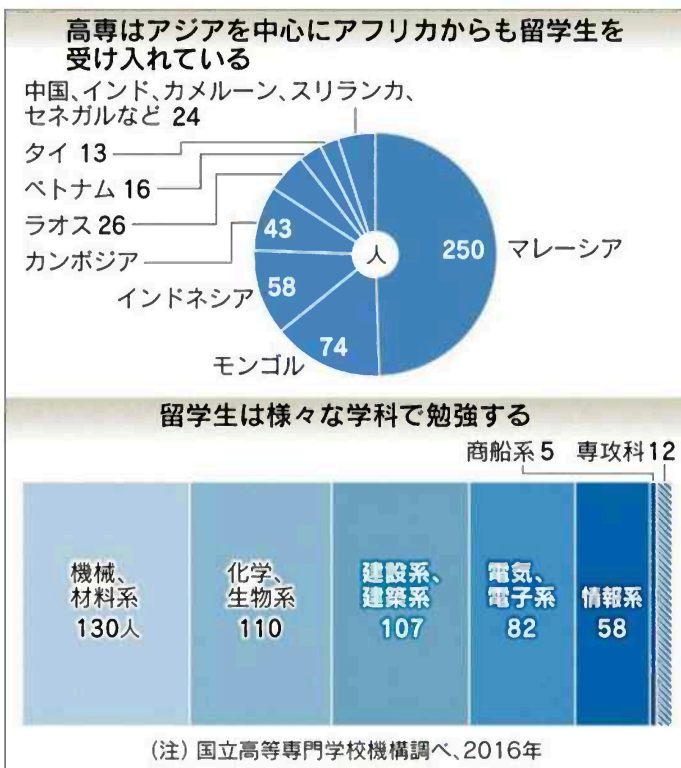
「小さい頃から車に興味が有り、実験などで手を動かすのが好きで、高専に学ぶ決意がにじむ」。色鮮やかなヒジャブを巻いたマレーシアからの留学生、ヌル・アフイカ・ピンティ・アデナ。彼女が通うのは日立製

英語教育に力

彼女が通うのは日立製

茨城高専で学んでいる（左から）インドネシアのアルディ君、マレーシアのアフィカさん、ラオスのヤーンユア君

大志抱き日本で修業



作所の企業城下町にある茨城工業高専（茨城県ひたちなか市）。同校に30年代から積極的に日本生として編入学し、機械システム工学科で自分

の可能性をたくり寄せの全留學生の約半数が同

る。周りからは「アフィカ」と親しみを込めて呼ばれている。

もともと日本の若者文化に興味があった中学時代に日本語を学び、留学を志すようになったという。マレーシアは1980年代から積極的に日本生として編入学し、機械システム工学科で自分

インドネシアからの留學生、同じ学科にはラオスからのチュートー・ヤーンユア君（同ヤーンユア）君もいる。

この2人は偶然にもそれぞれの兄が日本での留学経験があり、その足跡を追うように日本にやってきた。ヤーンユア君は「お兄さんから「化学の勉強をしっかりとっておけ」とハッパをかけられていた。その言葉に従って、現在、国立の高専だけに主として東南アジアから毎年100〜150人の留学生を受け入れ、エンジニアの卵を育成中。まだ20歳に満たない学生が日本の高専で学ぶことに不安はないのだろうか。

実はそこに高専の教育システムの強みがある。それはケアの手厚さだ。まずは寮生活で安全かつ安心して暮らすことが出来る。日本人学生と寝食を共にするから日本語の上達は早い。学費も安い。

寮にはチューター制度があり、同じ学科の日本人学生が勉強のサポートも行う。

自らも高専で教壇に立った経験があり、留學生のための支援の在り方に興味がある。熊本大学准教授（現在は熊本大学准教授）は「高専は志の極めて高い留學生の学びの場所としてふさわしい」と語る。濃密な人間関係が生かされるからだ。

例えば、アジアの内陸部からの留學生が元気が無ければ、これまで見なかったような海を一緒に見に行ったり、川に釣りに行ったりして気分転換をさせる。「こちらから留學生に寄り添わないといけない」と引地氏は語る。

高い経済成長を維持するラオスでは環境対策が後手に回り、社会インフラ整備もこれからだ。ヤーンユア君は会社を立ち上げ、こうした社会問題解決の役に立ちたいという。

若き3人の瞳は「いつかは母国のために」と輝く。名実共に高専がKOSENとなる日は近いと見た。

（編集委員 田中陽）

環境問題に関心

そして高専留学のメリットとして日本の高専生と同じように工学系大学への編入の道もある。

取材に応じてくれた3人はその道を選択した。アフィカさんは群馬大学、アルディ君とヤーンユア君は豊橋技術科学大学に通うことが決まって